

人間力が交流する新しいコミュニケーションマガジン

Oukan

Oukan Opinion

巻頭言

拓殖大学総長 渡辺 利夫

憲法前文に日本の「国体」を明示しよう

最近の旅行・観光を巡る動きと観光県やまなし

一般社団法人全国旅行業協会 専務理事 有野一馬

日本の本当の実力は — 電子政府の格付けに見る日本成長戦略の本丸 —

早稲田大学教授 小尾 敏夫



往還

2

Vol.

SEPTEMBER 2014

憲法前文に日本の「国体」を明示しよう

拓殖大学総長

渡辺利夫

和英辞典で「憲法」の項目を引きますと、Constitutionと出てきます。今度は、英和辞典でConstitutionの項目を引いてみますと、「体質・性質」といった訳語が出てきます。つまり憲法とは、元来が国家の体質、つまりは戦前期によく用いられていたものの、戦後には意図的に用いられなくなった「国体」が、すなわち憲法なのです。

そうであれば、憲法に日本という国家の成り立ちや国柄を示し、つまり日本という国家は何を受容し何を排除する存在なのか。この「国体」のことが、明示的にせよ黙示的にせよ、少なくともその前文に記されていないならば、それは日本の憲法とはいえない。この最も重要な観点からみて現憲法はとも日本国憲法といえるものではありません。

それでも、そもそも、日本とは他国とは異なるどんな固有の体質、つまり国体をもった国家なのでしょう。私は日本の国体は次の3つ、すなわち1つには「同質的」、2つには「自成的」（自ら成る）、

3つには「連続的」という形容詞で語るのが最も適切だとかねてより考えてきました。

日本は四方を海で囲まれた「海洋の共同体」です。同一の国土の中で、ほとんど同種の人々が、他国では使われていない、その意味で孤立的な言語である日本語を用いながら生を紡いできました。宗教上の争いが日本に亀裂を生じさせることはありませんでした。第2次大戦直後の一時期を別にすれば、他国の占領下におかれたことはありません。同種の人々が孤立的言語の日本語を用い、宗教上の亀裂もない「同質社会」、これが日本の大きな特質です。こういう「同質社会」は世界で、日本以外に探し出すことはなかなか難しいのではないのでしょうか。

日本も、古代にありましては、国家形成のために中国から多くのことを学びました。しかし、10世紀初頭に唐王朝が滅亡し、以来、大陸からの影響力は急速に失せてしまったのです。そして、日本独自の国家秩序が形づくられ、天皇という特有



新入生を前に「いかに学びいかに生きるか」を説く拓殖大学総長渡辺利夫氏（八王子国際キャンパス）

の称号と固有の年号が設定され、国名を「日本」としたのです。以来、1000年を超える連続たる歴史が営まれてきたのです。繰り返しますが、世界史上に類例をもたない「同質社会」が日本です。

日本が同質社会であることは、中国と比較してみれば歴然とします。中国の歴史を彩るものは、王朝の反復転変史です。易姓革命と呼ばれます。徳を失った皇帝は、新たに天命を授かった支配者によって命を革められます。これが革命です。また、皇帝の姓もまた易められるのですが、これが易姓なのです。革命の「革」も、易姓の「易」も、いずれも「あらためる」という意味です。

中国では、北方の遊牧民族や騎馬民族による征服王朝さえ、しばしば出現しました。近くはモンゴルによる元朝、満州族による清朝がそうです。つまり、多様な民族の混淆する「異質社会」が中国です。人類学の用語法でいいますと、同質社会である日本の発展が「自成的」、つまり自ら成ったものである一方、異質社会である中国の発展は「他成的」、つまり他文明の影響を徹底的に受けて成ったもの

だということが出来ます。

ですから、日本の歴史が「連続的」である一方、中国の歴史はきわだって「非連続的」です。異民族の征服や反乱、権力内部の大逆や謀反に彩られたものが中国史です。これに比べれば、日本ははるかに平穏な歴史を織り紡いできました。同質的で自成的で連続的な歴史をもつ日本人の体質がそうさせたのであろうと思います。先に、私が日本を「海洋の共同体」だといったのも、そういう私の歴史意識のゆえです。

この大いなる共同体、同質的で自成的な日本という国の在りようを、目に見える形として私どもの前に現出させてくれるものが、天皇です。現憲法では「天皇は、日本国の象徴であり日本国民統合の象徴である」となっています。確かにそういつてもいいのですが、それだけでは足りません。むしろ、天皇は日本という国家と民族の連続としてつづく歴史の象徴だといった方が的確であろうと、私は考えます。

平川祐弘先生は、あるエッセイの中で次のようにいっていますが、これが私の胸には響きます。

「天皇は敗戦後の憲法の定義では国民統合の象徴だが、歴史に形作られた定義では民族永続の象徴である。個人の死を超え、永世を願う気持ちこそ天皇と国民を結ぶ紐帯である」

かねて私の胸中にあつて形にならなかった感覚が、平川先生のこの卓抜な言語化によって霧が晴れたように感じています。

◎わたなべ としお

拓殖大学総長。1939年6月甲府市生まれ。慶応義塾大学卒業、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。外務省国際協力有識者会議議長。第17期日本学術会議会員。アジア政経学会理事長（元）。山梨総研理事長。JICA国際協力功労賞。外務大臣表彰。正論大賞。『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）。『新憲法論』（大平正芳記念賞）。『西太平洋の時代』（アジア太平洋賞大賞）。『神経症の時代』（開高健賞正賞）。『新脱亜論』（文春新書）。『アジアを救った近代日本史講義—戦前のグローバリズムと拓殖大学』（PHP新書）など。